

環境ボランティア活動におけるリーダーシップ・タイプとその効果に関する試論

東北大学国際研究文化研究科 学生会員 ○胡 亜楠
東北大学国際研究文化研究科 正会員 青木俊明

1. 背景と目的：

近年の大規模な経済活動や大量消費型のライフスタイルの普及に伴い、環境汚染、最終処分地の逼迫、資源不足など、様々な環境問題が生じ始めた。環境省によると、平成25年度国内ゴミ総排出量は4,487万トンに達した。このような状況を改善するには、リサイクルによるゴミ総量の削減が重要になる。また、リサイクル法の成立後、各自治体は廃棄物の分別収集も積極的に進めてきた。その際、地域レベルでは、リサイクル情報の収集、人集め、地域連帯感、といった対人的な働きかけに対して、環境ボランティア団体が重要な役割を果たすと考えられる。たとえば、Burn（1991）は、環境ボランティアによるリサイクル活動が行われている地域では、資源ごみの分別収集に対する住民の参加率が高く、リサイクルの実行可能性評価や規範意識の評価も高いことを報告している。また、少子化や人間関係の希薄化が進んでいる日本では、ボランティア活動はコミュニケーションの活性化や人間関係の維持などに貢献するため、環境ボランティア活動の継続意欲を高めることは社会的に重要だと言える。

松浦ら（1998）はボランティアのリサイクル活動によって、地域における実行可能性の高さや社会規範認知が変化し、結果的に地域住民のリサイクル行動の割合が高くなった。逆に、環境ボランティアが存在しない地点では、資源リサイクルへの態度は肯定的であるにもかかわらず実際の参加率は低いと報告した。

しかし、全国ボランティア活動実態調査報告書（平成22年）では、ボランティア活動継続意欲は、平成14年に比べて、活動休止を考えた経験が「ある」団体・グループは 6.4%増加している。すなわち、活動停止やメンバー減少といった問題に直面している団体が増えていると考えられる。このような状況を改善または

回避するためには、環境ボランティアの参加意欲と活動継続意欲を高めることが重要になる。

Hopper & Nielsen（1991）は、リーダーが存在する地域で個人的規範と社会的規範に顕著な変化がみられたことを報告している。さらに、環境配慮行動の意欲と継続意欲に向上も報告している。これより、リーダーシップは、メンバーの活動参加や継続の意欲向上の効果を持つと考えられる。このとき、リーダーシップには複数のタイプがあることを踏まえれば、それによってボランティアの集団への帰属意識、参加意欲、継続意欲は変わる可能性がある。そこで、本研究では、環境ボランティア活動において、リーダーシップ・タイプが集団のソーシャル・キャピタルや活動強度に与える影響を検討する。その上で、環境ボランティア活動の活性化策と継続強化策を提案することを目指す。

2. 先行研究

（1）環境活動におけるリーダーシップ存在の重要性

リーダーシップとは、集団目標の達成に向けて、メンバーたちが自発的に協力させる過程と定義できる⁶⁾

リーダーシップの機能に基づいて、成員が自発的に集団活動に関与し、さらに集団の信頼関係と凝集性を高めるという役割がある。例えば、Everett & Peirce（1991）は、地域社会の近隣ネットワークの密度が住民のリサイクル参加に及ぼす効果を検討した。その結果、隣人とのつきあいが多いほど、またリサイクルのボランティアリーダーがその住民をよく知っているほど、リサイクルへの参加率が高いことを見いだしている。事実Hopper&Nielsen（1991）は、リサイクル活動において、リーダーが存在することにより、情報の獲得、規範的影響（他者の期待）を増加し、リサイクル行動も促進されることを報告している。すなわち、リーダーの

キーワード：リーダーシップ、環境ボランティア、継続意欲、協力的行動、リサイクル

連絡先 〒980-8576 仙台市青葉区川内 41 国際環境資源政策論講座 TEL 022-795-4689

存在によって、メンバーの集団に対する帰属意識や信頼関係が高まると予測される。

（２）ボランティア活動の規定因

Aryら（1999）はボランティア活動参加活を通じて得られた有能感(自信やスキルの獲得など)も参加や継続の規定因であることを示した。Obersha（1997）は、集団への連帯感が強いほど、運動参加への心理的コストが低下し、社会運動が起こりやすいことを報告している。安藤ら（1999）はボランティア活動の継続や関与の意志決定では、組織への帰属意識が他者からの影響が大きいことを示した。

以上より、環境ボランティア活動の規定因とリーダーの存在の重要性は報告されているが、環境ボランティア活動を高めるリーダーシップ・タイプを検討した研究はない。そこで、本研究では、環境ボランティア活動におけるボランティアの継続意図を強めるリーダーシップ・タイプを明らかにする。

3. 試論

まず、ボランティア活動参加の継続意図に関わるリーダーシップを表-1に示す。そこでは、関係重視リーダーシップ（RLS）と強制型リーダーシップ（FLS）の2つを想定する。RLSは、組織の人間関係に焦点を置き、メンバー間のコミュニケーションを重視して結束力を高めるリーダーシップである。そのため、RLSの下では、メンバーは組織へ信頼感を高めることになる。その結果、集団への愛着が強まり、集団への帰属意識も高まると予想される。一方、FLSは、リーダーは自身の意志のみを重視し、メンバーの全ての行動をコントロールするリーダーシップである。リーダーは、メンバーに行動の自主裁量権を与えないため、メンバーの組織への帰属意識は低下すると予測できる。また、活動継続意図については、功利的動機（コスト、時間、キャリアなど）だけではなく、情緒的動機（愛着、連帯感などの帰属意識）も重要になる。具体的に、本研究ではリーダーシップのタイプと活動の継続意図は図-2の関係にあると考える。まず、関係重視リーダーシップの傾向が強いほど、環境ボランティアとしての活動の楽しさ、積極性などが高まる。それに伴うボランティア活動に継続する意欲が高くなる（仮説1）。

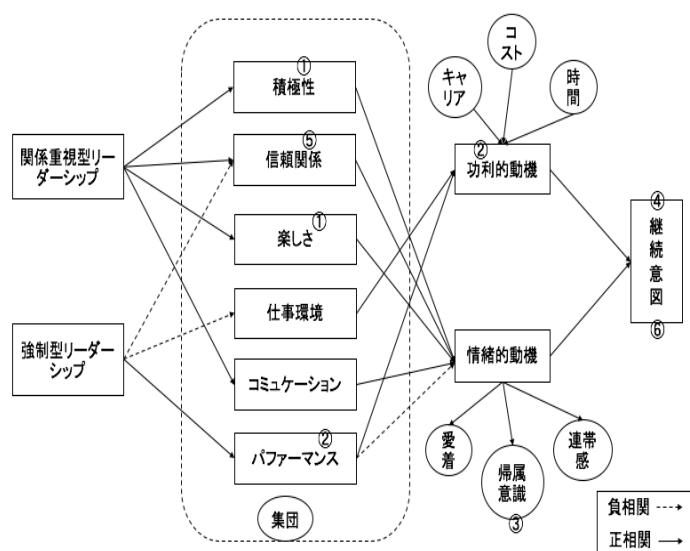


図-2 リーダーシップ・タイプと活動継続意図の仮説

一方、FLSの傾向が強いほど、環境ボランティアとしての活動パフォーマンス（身体的負荷、頻度、拘束時間など）が高まる。従って、環境ボランティア活動に継続する意欲も低くなる。（仮説2）さらに、環境ボランティアでは、短期間活動の場合には、RLSよりFLSの方が集団への帰属意識が高まり、活動の効率も高くなる（仮説3）。しかし、継続意図は低下する（仮説4）。長期間活動の場合、RLSは、自集団への信頼感を向上させ（仮説5）、活動継続の意図も高めると予測される（仮説6）。

4. まとめ

本研究では、リーダーシップを関係重視型と強制型二つに分け、それぞれがフォロワーの環境ボランティア活動に与える影響を検討した。今後は、実際のデータを収集して行う。

参考文献

- 1) 野波 寛・杉浦淳吉・大沼 進・山川 肇・広瀬 幸雄(1997) 資源リサイクル行動の意志決定における多様なメディアの役割—パス解析モデルを用いた検討—, 心理学研究, 68, 264- 271.
- 2) 杉浦淳吉・大沼 進・野波 寛・広瀬幸雄(1998)環境ボランティアの活動が地域住民のリサイクルに関する認知・行動に及ぼす効果, 社会心理学研究, 13, 143- 151.
- 3) 安藤香織, 広瀬幸雄:環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因, 社会心理学研究, 第15巻, 第2号, pp. 90-99(1999)
- 4) Everett, J. W. & Peirce, J. J. (1991) Social networks, socioeconomic status, and environmental collective action: Residential curbside block leader recycling. 265-84
- 5) 妹尾香織, 高 木 修:援助行動経験が援助者自身に与える効果:地域で活動するボランティアに見られる援助 成果社会心理学研究, 第18巻, 第2号, pp. 106- 118(2003)
- 6) 三隅二不二(1978)『リーダーシップ行動の科学』有斐閣